

『フランニーとズーイー』論：愛ゆえの虚偽

新田玲子

第一章：“the Fat Lady”¹ を “Zooney” の主題とする解釈の欠陥

1955年に発表された“Franny”と57年に発表された“Zooney”をひとつにまとめて、61年に出版された *Franny and Zooney* のうち、最初の“Franny”の物語は、Glass 家の末娘 Franny がボーイフレンドの Lane と過ごす週末に、次第に神経衰弱をつのらせてゆく様子を描いている。この中で Franny は、自分が神経衰弱に駆り立てられる原因はエゴであると明言する。

“I’m just sick of ego, ego, ego. My own and everybody else’s. I’m sick of everybody that wants to *get* somewhere, do something distinguished and all, be somebody interesting. It’s disgusting – it is, it is.” (29)

Franny は、よりよいものを追いかけること、より優れたことを成そうとすることを、向上心と見なさない。Franny はそういう願いを、価値もないのに人よりも目立ち、偉そうな振りをしたいという、人間の見栄と結びつけて嫌悪し、そこから生じる競争心が他の人を思いやる心を忘れさせてしまうがゆえに一層、そうした見栄を耐えがたく感じる。そしてついには、競争を逃れられない現実世界に背を向け、絶えず主の祈りを口にするようになる。

このような状態で家に逃げ帰ってきた Franny に対し、すぐ上の兄 Zooney が様々な言葉と方法で働きかけるのが、後半の物語“Zooney”である。この物語の最後で Zooney は、かつて長兄の Seymour が言及した“the Fat Lady”についてイメージを膨らませ、醜い姿で知的レベルが低そうな死にかかった女性を描き出し、彼女とキリストを同一視することによって、すべての人間を肯定する姿勢を打ち出す。そして、Franny が女優の素質を持っているならば、“the only religious thing you can do, is *act*. Act for God” (197) と、エゴを最大限に活かして生きることを勧め、すべての人を肯定するように自分の価値も肯定し、自分の姿を見極めたうえで、自分の最高のものを出し切って生きることがもっとも素晴らしいと、主張する。

さて、Franny の神経衰弱を通して、青年が現実世界で直面する精神的な問題が明示され、Zooney が“the Fat Lady”のイメージを用いて伝える人間肯定と博愛のメッセージの後で、Franny が安らかな眠りにつくところから、Alfred Kazin, John Updike, Mary McCarthy, Frank Kermode² を初めとする多くの作家が、“the Fat Lady”に込められた Zooney のメッセージを作品の主題として受け止め、そのメッセージの欠点を作品そのものの欠陥として非難している。例えば、Kazin の批評は、“what is ultimate in their love is the love of their own moral and intellectual excellence It is the love that they have for themselves as an idea.”³ と、かなり正面きったものであるし、彼よりは控えめな言い方をしている Frank Kermode でさえも、“as one of his admiring audience, I find it hard to believe he could be selling anything so simple and untrue.”⁴ と、結末で Franny が救済さ

れた方法を買ってはいない。

確かに、*Franny and Zooey* の全体を通し、すべての人を愛そうとしてもどうしても愛せない場合があることが、繰り返し述べられているので、人間の醜さや愚かさを総て受け入れた愛の主張は現実離れした博愛主義にみえるし、それが愛せないで苦しんでいる Franny の救済になるとも思えない。しかし、いくつかの点を考察すると、作品の主題は “the Fat Lady” のメッセージにあるようには全然思えないのである。

例えば、このメッセージに込められた主張が作品の最後に突然現われたものでないことに、注目すべきである。それは作品を通して何度も繰り返される主張で、“Zooey” の初めの浴室の場面でも、Zooey が読み返す兄 Buddy からの手紙に、かつて Seymour がバスに乗っている最中に、“all legitimate religious study *must* lead to unlearning the differences, the illusory differences, between boys and girls, animals and stones, day and night, heat and cold.”(67) と告げたと、書かれている。Seymour の言葉は、宗教の奥義をバスに乗っている最中に話す行為と同様、人間が下す善悪美醜の違いを越えた本質へ立ち帰る重要性を強調しており、その点ですべての人を等しくキリストとみなす Zooey の主張と一致する。また、Zooey が居間で Franny と話す場面でも、彼は、“who in the Bible besides Jesus knew – *knew* – that we’re carrying the Kingdom of Heaven around with us, inside, where we’re all too goddam stupid and sentimental and unimaginative to look?” (169-70) と問いかけ、妹がどう考えようとも、すべての人間は神を内包しているすばらしい存在なのだ、伝えようとしている。従って、すべての人間を肯定し愛するという思想そのものが作品の主題であるならば、最後の場面で “the Fat Lady” のメッセージを待つまでもなかったし、Franny の救済は、遅くとも居間の会話の段階で起こっていなくてはならなかった。

ところが、この人間肯定と博愛の思想は救済となるどころか、実はそれがあったからこそ Franny は神経衰弱にかかったのだということが、“Franny” 中の Franny 自身の言葉にすでに明白に示されている。

“I’m not afraid to compete. ... I’m afraid I *will* compete – that’s what scares me. That’s why I quit the Theatre Department. Just because I’m so horribly conditioned to accept everybody else’s values, and just because I like applause and people to rave about me, doesn’t make it right. I’m ashamed of it. I’m sick of it. I’m sick of not having the courage to be an absolute nobody.(30)

Franny は演技に優れているが、その結果与えられる賞賛は、彼女を他の人よりも優れているとみなす。ところが、彼女はすべての人はみなそれぞれ等しく価値があるとする、大きな肯定の姿勢で育てられたため、演技がうまいからといって人より優れているように感じることに罪悪感を覚え、賞賛を欲しがらる気持ちを醜いと考え。その結果、自分は確かに素晴らしいと感じる気持ちと、すべてを肯定する大きく美しい精神を愛する気持ちとの板挟みになって、Franny は身動きがとれなくなっているのである。

これを裏付けるように、後に Zooey は、“We’re freaks, the two of us, Franny and I ..., and both those bastards are responsible”(103) と述べている。Zooey と Franny が育てられた、すべての人

間を肯定し愛するという、非常に観念的で理想的な教えは、“the Fat Lady”が Seymour の言葉であったと同様、Seymour と彼の信奉者 Buddy が信じていた教えである。そして、この教えと現実との矛盾が Zooley や Franny の苦しみになっているために、Zooley は二人を責めているのである。

従って、Zooley が “the Fat Lady” で伝えようとした博愛それ自体は、いまさら Franny の神経衰弱の救済となりえるはずもないし、この作品の主題として提示されているとも思えないのである。

第二章：うさぎ好きの妹

Franny の救済が “the Fat Lady” に込められたメッセージそのものでないとする、それでは一体何が救いをもたらしたのだろうか。それを考えるにあたって、まず Franny の性質を考えてみる手がかりとなるだろう。

Franny は基本的に Zooley とよく似ている。互いに年齢が近く、共に Seymour と Buddy の精神教育を一身に受けたというだけでなく、一家の中でこのふたりだけが外観的な美しさを持ち、そして一方は俳優、他方は大学の演劇部で活躍する俳優の卵、というふうに、世俗的な職業を天職としている。だが、このように似かよったふたりにも決定的な違いがあることが、Franny の目の描写に窺われる。

Her eyes were very nearly the same quite astonishing shade of blue as Zooley's, but were set farther apart, as a sister's eyes no doubt should be – and they were not, so to speak, a day's work to look into, as Zooley's were. Some four years earlier, at her graduation from boarding school, her brother Buddy had morbidly prophesied to himself, as she grinned at him from the graduates' platform, that she would in all probability one day marry a man with a hacking cough. So there was that in her face, too. (125-26)

Zooley に似た驚くほど青い目は、Franny が Zooley と一緒に受けた精神教育の高い理想を象徴しているが、妹らしさとして描写される彼女の目の優しく受け入れやすい印象が、この理想において Franny は Zooley ほど徹底していないことをほのめかしている。Buddy が、Franny はいつか兄の目からすればくだらない男と結婚してしまうだろうと警戒するのも、彼女がものの表面的姿に兄達ほど無関心でおれず、見ために左右されて内面の判断を誤る可能性が大いにあることを感じさせる。

ところで、Buddy の予言に Franny の性格の甘さに対する批判的なニュアンスが感じられるように、居間の場面における Zooley の態度にも同様の批判的態度が観察される。例えば Zooley は、Franny の態度を批判するたびに、小さな雪だるまの入ったガラスのペーパーウェイトを揺すり、ガラス (glass) の内の世界に吹雪を起こしている。それは、純潔な生き方を求めて Glass 家の中に逃げ込んでいる Franny が、雪だるまのようなかわいらしいものだけが住む清く美しい世界を求めていると、批判しているようである。しかも、ペーパーウェイトを揺すると並行して、Zooley は 0 の字の穴を塗りつぶしてゆく。0 は数字のゼロ (無) を連想させるので、家に逃げ帰ることが無意味な現実逃避であること暗示している。だからその穴を埋めようとする行為は、美しい

ものだけを追い求めていても本当に意味のある人生は送れないことを気付かせたいという、Zooneyの願いを象徴している。

同様の批判は、Zooney が、“You’re constitutionally unable to love or understand any son of God who throws tables around.” (164) とか、“I don’t happen to be attracted to the St. Francis of Assisi type. But *you are*.” (165) とか、言うときにも窺われる。ここで Zooney は、Franny がイエスの一見乱暴に見える行為に惑わされ、その底に神の愛を持って行動していることを理解しようとせず、小鳥に説教する St. Francis のような清く美しいイメージに作り替えていると非難しているのだが、それもやはり彼女が外面的な影響を免れないことを否定的に捕らえた結果の言葉である。

このように、居間の場面の終わりで Franny が泣き崩れるのを見るまで、Zooney は、妹の甘さが問題を大きくしており、その甘さを克服しさえすれば、自分が何とか現実との接点を保ちながら生きてるように、Franny も生きて行けるだろうと考えているようである。その結果、Zooney の批判は妹に対する思いやりから生じたものであるにもかかわらず、妹の性質を無視した厳しさのため、清く美しいものしか受け入れられない Franny に拒否反応を起こさせてしまう。さらに、Franny は、“I *knew* how I was depressing people, or even hurting their *feelings* – but I just couldn’t stop!” (145) と自分自身にうんざりしているように、自分に対する自信をすっかり失いかけていたので、Zooney の批判的な言葉はこれに追い打ちをかけ、神経衰弱を悪化させる結果にしかならなかったのである。

しかし、居間の会話の最後で泣きだした妹の姿を見て色を失うとき、Zooney は、自分の性質と妹の性質を混同した結果が妹をさらに追いつめてしまったことを自覚する。

It was very like the standard bloodlessness in the face of a small boy who loves animals to distraction, *all* animals, and who has just seen his favorite, bunny-loving sister’s expression as she opened the box containing his birthday present to her – a freshly caught young cobra, with a red ribbon tied in an awkward bow around its neck. (171)

生きとし生けるものの中にはコブラのように人間にとって有毒なものもいれば、ふわふわしたうさぎのように人間の目に愛らしい姿のものもいる。すべてのものが等しく生を受けて誕生したことを考えれば、その違いを人間の基準で判断し差別することは不当である。しかし、人間的感情を押さえて神の立場に帰り、すべてを受け入れて生きてゆくことは、コブラの姿に耐えうるほどタフでなくてはならない。そして誰もが等しくタフに作られていないとすれば、その弱い本質を否定して、あえてコブラを受け入れさせようとするのは、弱い人に対してあまりに冷酷であろう。Zooney や Buddy には物質世界に縛られた欠点として映ろうとも、Franny という名が St. Francis を連想させるように、彼女の本質は Zooney やイエスよりも St. Francis の清く優しい性質に近く、その本質を考慮しなくては、Franny を本当に救うことはできないのである。

第三章 真の愛のための虚偽の愛

さて、Alfred Chester は、どんな醜い人々でもキリストなんだという作品の最後の主張に関し、この主張が受け入れられるのは醜い人達が回りにいない場面で、しかもシーモアの言葉を通じて語

られるからにすぎないと非難している⁵。結末部分は、居間の場面の誤りを踏まえ、外的要因に左右されやすい Franny の本質を考慮した可能性が大いにあるので、彼の非難は不適當であろうが、最後の場面で Zoey が外的要因に多分に配慮している点は事実である。

例えば、Zoey が Buddy の名をかたって電話をかけてきたために、Franny は閉じ込もっていた居間から引き出され、その結果、新たな雰囲気に影響されることになる。

...she was nonetheless very peculiarly transformed as she moved. She appeared, vividly, to grow younger with each step. Possibly long halls, plus the aftereffects of tears, plus the ring of a telephone, plus the smell of fresh paint, plus newspapers underfoot – possibly the sum of all these things was equal, for her, to a new doll carriage. (185)

廊下で出くわす日常の非常に些細な現象が、Franny を子供時代へいざなっている。それは、醜い利己心に支配された大人の世界から、そういう感情が入り込む以前の、純粋な感動で占められた世界への移行を示唆しており、Franny にとっては、移動という行為そのものが、閉じていた心を開くきっかけとなっていることが理解される。そして、些細な外的要因がこのような内的変化をもたらしていることが、最後の場面の会話の性質と成功の伏線となっているように思える。

最後の場面における Zoey の配慮として、この会話がそれまでの会話と違い、間接的会話であることが指摘できる。Salinger のどの物語でも、直接交される話し言葉では心を伝えるのが難しく、大切なメッセージは手紙や日記等の間接的方法に頼っている。それは、普通の人には外的要因に左右されやすいため、相手が見えないほうが言葉の真の意味を察しやすいためと考えられるが、Franny の場合においてもそのことが当てはまるようである。

例えば、Buddy からかかっていると思った電話が Zoey ののものであると気付いたとき、Franny は、“All right, Zoey. Just stop, please. Enough is enough.... if there's anything special you have to say to me, please hurry up and say it and leave me alone.” (192) と反応する。そこには兄の言葉に真剣に耳を傾ける姿勢はなく、ただもう早く話を打ち切りたいという気持ちが露である。しかし、その後続く兄の沈黙に彼女の態度は変化する。

There was a peculiar silence at the other end of the phone. And a peculiar reaction to it from Franny. She was disturbed by it....“I'm not going to hang up on you or anything,” she said. (192)

お互いに姿が見えれば、激しい気性の Zoey らしい言葉がすぐに口をついて出たであろうし、そうならば Franny のほうでも喧嘩腰で応答することになったであろう。しかし、心が通じないという思いは、相手が見えないために一段と大きくなり、当惑は増し、ふさわしい言葉を探すのに普段以上に時間がかかっている。その結果、Franny の側に、一時的な感情の爆発を和らげ、兄の側に生じている沈黙の意味を考える余裕がもたらされている。そして、続く Franny の台詞で語調が弱まり、幾分でも兄を気遣った様子が見られるように、忙しい仕事に追われながら、ありがたがられもしないのに、それでも一生懸命に話しかけてくれる兄の思いやりに、Franny は初めて気付いた

ようにみえる。このように、間接的会話は見えない距離と時間のおかげで、Franny の心を人の心へ向かせるために重要な働きをしているのである。

しかし何と言っても、最後の会話で Zooley がもっとも期待したのは、Seymour の影響であろう。Zooley 自身は、“This whole goddam house stinks of ghosts.” (103) と叫ぶことからわかるように、自殺した Seymour の限界を認め、彼に追従することはない。しかし、清く美しいものに惹かれる Franny には、いつでも誰にでも優しく、一家の精神的支柱として崇められていた長兄を否定する世界は、生きるに値しない世界である。従って、現実世界で生きてゆけるように、現実世界に対する信頼や愛着を Franny に取り戻させるには、また、その中で生きてゆく自分に自信を取り戻させるには、Franny にとっては教祖ともいえる Seymour と彼の教えとが肯定されなければならなかった。

それ故、この会話の最後で語られる “the Fat Lady” に表わされたメッセージが、現実世界では Seymour にさえ実現できなかったほどの超精神的な幻想であったとしても、またそれが、新しいペンキの匂いや、間接的伝達方法によってもたらされた余裕や、Seymour の名前が呼び起こす幸福感、というような外的要因に助けられた虚偽の愛であったとしても、それは問題ではない。Seymour が信じていた大きな愛が再び実感できることが、誰も愛せなくなりかけていた Franny がもっとも必要としていたものであったし、妹を現実世界に引き戻せるなら Zooley にはどんな虚偽の愛でも我慢できたからである。

結局、Zooley は最後の場面において実に見事な演技をしたのである。そして、そこで伝えられたメッセージは虚偽の愛であったとしても、自分の思想を押しつけるのではなく、妹の性質を思いやり、妹の本当に必要としているものを差しだした行為は、真実の愛だったといえるだろう。

第四章 潰瘍病みの Zooley

Zooley は兄 Buddy と同様、純粋な精神世界に妥協のない鋭い目をしているが、兄が物質主義的現実から逃避した生活を送るのに対し、彼は俳優という世俗的職業で生きゆく。それは、Buddy の生き方について、“He does everything else Seymour ever did – or tries to. Why the hell doesn't he kill himself and be done with it?” (103) と非難しているように、生きているにもかかわらず人間としての現実生活を無視した生き方は死んでいるよりも悪いと、Zooley が考えていることと関係する。

Zooley はまた、Seymour の限界を見つめることもできるので、Franny のように大学や恋人との関係から逃れて家に逃げ帰ることもできなければ、虚偽の愛にごまかされることもない。そのため、演劇脚本家の Hess とのやりとりにもみられるように、最後には我慢できなくなる自分の性質を承知のうえで Hess に会いに出かけもすれば、彼の脚本を読み、彼の劇を演じもし、その結果、潰瘍を病むことにもなるのである。

このような、Franny とも Buddy とも異なる Zooley の性質は、“Zooley” の初めで描かれる彼の描写に象徴的に表わされている。まず、細っそりとした小さめの体つきと、天使の羽の付け根を思わせる背中の骨が、大人になっても子供のような純粋さを保つ超俗的で精神的な一面を暗示し、一方、非常にハンサムで、しかも俳優という外観にたよった職業で成功していることが、現実的で物質的な一面を示唆する。従って、現実世界と精神世界の両方にいい加減に妥協して生きてゆくこと

もできなければ、それらのどちらか一方に傾倒してしまうこともできないわけで、彼の外観が“a young, underweight *danseur*” (123) という印象をもたらすことや、彼の行為にときどき感じられるアクロバットのな巧妙さが象徴的に示すように、Zooney はふたつの相反する価値を持つ世界の間で、苦しみながらも何とか巧妙なバランスを取って生きているのである。

こうした Zooney 独特の生き方をよく示す特徴が葉巻である。登場する Glass 家の誰もが、難しい立場に置かれるたびにたばこを吸う。気分を変えたり、或は、たばこで間を置くことによって、事態を幾分かでも緩和するために吸うのであるが、Glass 家の誰もが並以上の感受性を持っているとされるので、彼らは並以上の困難に直面し、結果、吸いすぎるほどたばこを吸うことになる。なかでも Zooney は、たばこでは不十分だというように葉巻を吸う。しかも、“He had been smoking them since he was sixteen” (124) とあるように、彼には葉巻は馴染みが深く、不釣り合いでないとされている。さらに、16歳という年齢についていえば、Zooney が潰瘍について、“Anybody over sixteen without an ulcer’s a goddam spy.” (140-41) と述べる中にも現われるように、純粹だった子供が大人の世界に入りかける年齢として用いられているようである。従って、そういう年齢からいち早く葉巻を吸っている Zooney は、現実世界で生きて行くために誰よりも大きな困難を背負っていることが察せられる。

葉巻と同様、Zooney の困難な生き方を緩和するために役立っているもうひとつの力は、彼の外観で目立つ特徴としてあげられているエスプリである。

... any one of a hundred everyday menaces – a car accident, a head cold, a lie before breakfast – could have disfigured or coarsened his bounteous good looks in a day or a second. But what was undiminishable, and, as already so flatly suggested, a joy of a kind forever, was an authentic esprit superimposed over his entire face(52)

ここで語り手が記している生き生きとした精神があればこそ、Zooney は、浴室で母親と交わす決して楽しくもない会話の中から、母親のちょっとしたユーモアを見つけだして笑うこともできるし、居間で妹のふさぎ虫を相手にしながらも、窓の下を通りかかる女の子のかわいい姿に目を奪われることができるのである。Franny がすべての人をひとまとめに批判し、拒否してしまう態度について、Zooney が “I agree with you about ninety-eight per cent on the issue. But the other two per cent scares me half to death.” (161) と述べる場面があるが、世の中のたった2パーセントの素晴らしいものを見逃さず、敏感に感応し、その2パーセントを残り98パーセントのくだらないものをしのぐほど徹底して味わえる力が、Zooney のエスプリである。そしてこのエスプリこそ、Glass 家の兄弟の中でも最も難しい生き方をしている Zooney を、精神的に支えているものなのである。

第五章 愛の物語としての *Franny and Zooney*

Zooney は、超俗的な精神世界の奥の深い知恵の美しさを求めながら、現実世界で人間が作り出す思いがけない美しさに感動する心も持ち続けている。しかし彼の生き方が、潰瘍と一生縁が切れず、事あるごとに葉巻で気を紛らせ、エスプリのおかげでやっと笑える、といったものであるように、Zooney には現実世界の物質的な面や精神的限界に働きかけて、調和の取れた形に変える力は

ない。従って、彼が Franny に与えられた最大のものは、妹に対する愛以上のものではない。そしてこの愛は、兄と妹の關係に支えられているように、“the Fat Lady”を通して説かれた無差別の愛ではないが、イエスの愛に似て形に捕らわれず、妹が自信を取り戻すためなら虚偽の愛を真らしく演出してみせさえる、本当に相手を思いやった愛である。

“Zooney”の中で Zooney が取った行為が、Franny に対する愛に基づいているのと同様に、“Franny”と“Zooney”というふたつの物語の成立には、兄 Buddy のふたりに対する愛情も感じられる。というのも、“Franny”に描かれる Franny の苦しみには、Glass 家の兄弟が一樣に直面した問題、すなわち、現実世界の中で精神世界を保ちがたいことに、真剣にぶつかってゆく Franny の純情さに強い共感が感じられるし、“Zooney”では、Franny を救おうと努力する Zooney の姿の中に、妹以上に難しい生き方を選んだ Zooney の苦しみがち々と描かれ、妥協のない精神世界を守りながらも、現実世界との接点をしっかりと保って生きてゆく Zooney の勇気や忍耐が賞賛されているように思えるからである。つまり、Buddy とは違った生き方を選んだ Franny と Zooney に、この作品は陰ながら声援を送っているようにみえるのである。

“Zooney”の初めで Buddy は、この物語は“a compound, or multiple, love story, pure and complicated” (49) と定義しているが、*Franny and Zooney* という作品自体が、様々な形で互いに支えあっている家族の愛の物語である。そしてその愛は、それ自身で現実の問題を解決する力になり得ないとしても、誰も愛せなくなった Franny にもう一度愛を取り戻し、生きる勇気を与えることができたように、苦しみながらも最善を尽くして生きてゆく兄弟達を支える大きな力となっているのである。

註

- 1 *Franny and Zooney*, J.D.Salinger (Boston: Little, Brown and Company, 1955), 199. 以下、本文からの引用はすべてこのテキストにより、引用の後に頁数を付することとする。
- 2 Alfred Kazin の、“Everybody’s Favorite,” *Atlantic*, 208 (August 1961), 27-31、John Updike の *New York Times Book Review*, (April 1963), 7、における書評、Mary McCarthy の、“*Franny and Zooney*,” *Harper’s*, 225 (October 1962), 46-48、Frank Kermode の、“J.D.Salinger: One Hand Clapping,” *New Statesman*, 8 (June 1962), 831-32、を参照。
- 3 “Everybody’s Favorite,” Alfred Kazin, 51.
- 4 “J.D.Salinger: One Hand Clapping,” Frank Kermode, 832.
- 5 “Salinger: How to Love Without Love,” Alfred Chester, *Commentary*, 35 (June 1963), 473.

Franny and Zooey: Phony Love for True Love

REIKO NITTA

In 1961, "Franny" (1955) and "Zooey" (1957) were published as a complete book, *Franny and Zooey*. Understanding that "Franny" presents the conflict between the spiritual integrity and the real material world, and that "Zooey" advocates philanthropic love to overcome the conflict, most critics denounce the book, criticizing Zooey's solution for being conceited and unreal. Though at the end Franny seems to recover from the breakdown, listening to Zooey identifying Seymour's "Fat Lady" with Christ and emphasizing the importance of accepting the people and the world as they are, this ending love message is neither Salinger's solution nor the theme of the book. All through the book, it is clearly shown that Zooey shares Franny's problems and will continue to suffer from them in the future, and that these problems are actually rooted in philanthropic love itself.

The book also tells that in spite of their common learning of Seymour's high spiritual ideals, there are some differences between Franny and Zooey. Zooey has a severe uncompromising eye and is strong enough to stand the pain caused by disillusion in the real world. Contrarily, being sweet and gentle, Franny is more easily affected by appearances and cannot accept ugliness or severity by nature. From the outset, Zooey regards her naïve antipathy toward the ugly reality as her weakness and tries to change her attitudes. Later, however, he drives her into deeper despair with his sincere efforts and realizes that without accepting her naïveté, he can never help her out of the breakdown.

At the end of the book, when Zooey quotes Seymour's words, he resorts to Seymour's magical effect in order to remind her of something nice in the real world. Zooey well knows that philanthropic love conveyed through the image of "the Fat Lady" is phony. Still, this phony love is what Franny really needs to regain the confidence in the real world, and is the only true love Zooey can offer to his sister.